青少年育成センターだより

第１０４号　２０２１．２．１

防府市教育委員会生涯学習課
青少年育成センター
０８３５－２３－３０１３

スキンシップについて考える（１）

かつては、お母さんにおんぶ紐でおんぶされている赤ちゃんの姿を見ることが多かったのですが、最近は、抱っこ紐が主流になり、抱っこされている姿をよく見かけます。抱っこされた子どもが、お母さんの顔を無邪気に見ている姿は本当にほほえましい風景です。

かつては、おんぶされていたので、赤ちゃんはお母さんの顔を見ることができませんでしたが、かわりにお母さんと同じものを見ることができました。“抱っこ”と“おんぶ”のどちらもお互いの肌の温もりを感じることができます。そこで赤ちゃんは安心し、母親の愛情を感じ、ここ（母親）が自分の安全基地なのだと思うようになるそうです。“抱っこ”と“おんぶ”、ともに大切な親子のスキンシップです。

ある時、薬局で薬の調合を待っている時に次のような光景を見ました。１組の親子は、子どもが書架にあった絵本を母親のところに持って行き、読んでもらっていました。もう１組の親子の姿は、子どもにスマホを与え、動画を見せていました。このお母さんは疲れていたのかもしれませんが、親子で一緒にいても、この２組の親子関係は違います。この違いは、スキンシップがあるか、ないかの違いです。

スキンシップについては、「幼児期に母親から添寝などを通じて肌にたくさん触れられて育った子どもは、成長してからも情緒が安定し、社交性が高く、他人を攻撃する傾向も低い傾向があり、反対に母親とのスキンシップが少なかった子どもは、人間不信の傾向が高く、自尊感情は低い傾向がある」と言われています。このことから、いかにスキンシップが大切であるかということがわかります。

また、母親と父親のスキンシップの違いについて、「母親によるスキンシップには、子どものストレスを和らげたり、情緒を安定させたりする効果があり、父親によるスキンシップ（例えば「肩車」や「高い、高い」等）では、子どもの『社会性』などを育てる効果がある」と言われています。このことから、母親とのスキンシップだけではなく、父親とのスキンシップもともに大切なのです。そこで、育児は母親に任せるのではなく、父親と母親が協力して行うことが重要だということが分かります。父親も頑張らなくてはいけませんね。

スマホにスキンシップはできません。スマホに頼った育児では、親子の愛着関係を築くことはできません。お父さん、お母さん、子どもと肌と肌が直接触れ合うスキンシップの機会を増やすようにしましょう。

明治時代、大森貝塚を発見したエドワード・モース（米国）は日本人と一緒に生活する中で気づいたことを日記に綴っていたそうです。その言葉を紹介しましょう。

「日本ほど子どもが大切に扱われ、深い注意が払われる国はない」「日本の母親ほど辛抱強く愛情に富み、子どもに尽くす母親はいない」「両親を敬愛し、老人を尊敬すること、日本の子どもに如くものはない」

いかがでしょう、これが本来の日本の親子の姿なのです。

（文責＝青少年育成センター指導員　藤村）